



東国千年の都

第1部

パワースポットへ ようこそ！—古墳時代の祈りのかたち—



第2部

発見された タカラモノ

—新発見！—

前橋・高崎の 発掘調査速報！

前橋・高崎連携文化財展の開催にあたって

「東国千年の都」を統一テーマに、両市の連携事業の一環として平成24年度より開催してまいりました前橋・高崎連携文化財展も、今年で6年目を迎えました。

この文化財展は、前橋・高崎両市が所有する多くの文化財のうち、特に発掘調査によって出土した学術的に価値の高い遺りすべりの考古資料を両市から持ち寄り開催してまいりました。

これまでの9年間で、25,000人を超えるご来場者をお迎えすることができましたが、これも両市の皆さんが、先人の歴史を大切にされている証であるとともに、連携事業の相乗効果が発揮されたものと感じております。

今年度につきましては、「パワースポットへようこそ！—古墳時代の祈りのかたち—」をテーマに、今から約1,700年前から始まる古墳時代における「カミヤツリ」のさまざまな形を紹介いたします。貴重な歴史・文化資産が、私たちに古墳のくらしについて語りかけてくれるでしょう。

日本人は、古来より様々な場所に「カミ」を感じ、神々な「ツリ」を行ってまいりました。その原形を、今回の展覧の中に感じ、見出したいだけではないです。

ぜひ、お楽しみください。



前橋市長
山本 龍



高崎市長
富岡賢治

主催 前橋市・前橋市教育委員会／高崎市・高崎市教育委員会
後援 上毛新聞社、前橋市教育委員会、毎日新聞社、
前橋市教育委員会、高崎市教育委員会、東洋新聞社、
群馬県立歴史博物館、前橋市立歴史博物館、
群馬県立民俗学館、前橋市立民俗学館、
NPO法人前橋歴史文化研究会、前橋市立歴史文化研究会、
前橋市立歴史文化研究会

第1章 ムラのマツリ —集落祭祀—

ムラでは様々な場所でマツリが行われていた。特に群馬県では火山災害で埋もれた遺跡（中宿遺跡、黒井峯遺跡など）からその景観が復元できる。たとえば樹木の下、道の脇や交差点、畠のすみ、炭屋の窪み、家の脇、湧き点など、さまざまな場所に土器が供えられた様子が確認されている。

これらは当時の人々が、種々の場所や事物を対象として、多様な神々に祈りを捧げていたことを示している。



大量に出土した土器

寺尾東館 I・II・III遺跡

2か所の祭祀跡が検出され、300個以上の土器や2000個を超える滑石製の玉類が出土した。祭祀跡には特別に穴が掘られていたり土が盛られてはならず、傾斜面をわずかに削って整地したのみである。この大量の遺物はマツリ（祭祀）で供えられたという考え方があり。遺跡の北東には、観音山丘陵から東へ飛び出た小坂山が位置する。小坂山は古来より神聖な山の形である円すい形（神奈輪型）をしており、信仰の対象となっていた可能性がある。

大屋敷遺跡

前橋市総社町総社に所在する。大屋敷遺跡は、北方に総社古墳群、南西に山王廃寺、南南西には上野国府が展開している。6世紀前半の97号住居跡から白玉131点や勾玉や剣形、刀子、鏃などの製品と多数の細片が出土した。多量の細片と多種多様な製品から、97号住居跡は石製模造品の製作工房と考えられる。他にも6世紀前半の住居跡から須恵器高環形器台や土師器大型高環が、6世紀後半の住居跡からは須恵器台付長頸甗が出土し、通常の集落とは異なる様相を見出せる。また、奈良・平安時代においても円面硯や金銅製腰帯具などが出土していることから、本遺跡は古墳時代から平安時代の長期間にわたって重要な集落であったことがうかがえる。



扁平な石製模造品

第2章 豊穡を願う —農耕祭祀—

古墳時代はコメに代表される穀物に依存する社会である。穀物の収穫量の多寡は彼らの生活を左右していたことであろう。病虫害や干ばつを防ぎ、安定した収穫が確保されることを願い祭祀を行なったのであろうか。農耕祭祀の背景には、日々の生活を左右する穀物の「豊穡を願う」という切なる望みが存在する。

元総社首海遺跡群

元総社首海遺跡群は前橋市元総社町地内に所在する。平成23年度の調査で古墳時代の遺物集積遺構が検出された。ここからは総数173点の土師器や須恵器、白玉などの遺物が複重なるように出土した。その範囲は南北約1m×東西2mのほぼ長方形であり、ほとんどが完形に近い土器群で構成されていることや滑石製の白玉の存在などから集落内で行われた農耕祭祀であると考えられる。



まとまって出土した土器群

戸田貝戸遺跡

展示した土器は、6世紀初めにおきた、権名火山大爆発により噴出した火山灰に埋もれていた。出土場所は畠の脇にあり、6個体の土器を並べ置く。坏形土器の中には白玉を数個入れたものもあった。初夏に降った火山灰に埋もれているため、植えた作物の豊かな実りを願うマツリではないかと考えられる。



畠の脇から出土した土器

首長による居館でのマツリ - 居館祭祀 -

第3章

古墳時代の前半にあたる4世紀において、高崎市の南東部や前橋市南部にあたる低地部を開発した首長は、5世紀以降になると水源地帯である山麓の開発に着手する。彼らは水田開発、灌漑用水の整備などの開発を主導し、その居館内では水にかかわる様々な祭祀が行われた。これらの祭祀は水利を司る首長の権威を高めるとともに、地域の紐帯を深める役割を果たしたに違いない。

三ツ寺I遺跡

井野川に流れ込む小河川である猿渡川を居館の濠に引き込む形で遺跡は立地する。居館は86m四方の方形で、幅32～40m深さ4mの大規模な濠が巡る。居館は周囲の濠を掘った際の土を使って盛土し、館外周の斜面には石積が築かれている。館には遺跡西方から濠を渡る木製の水道橋が設けられて内部に水を導き入っていた。その聖なる水を用いた祭祀を行う場と推測されている石敷道橋が2カ所確認されている。



自然への祈り - 自然祭祀 -

第4章

古墳時代において、神は姿を持たず、人が近寄ることができない場所に存在すると考えられていた。地震や津波、火山災害等常に自然の脅威にさらされてきた人々にとって、その信仰の根底には自然に対する畏敬が存在したであろうことは想像に難くない。周囲を赤城山や権名山などの秀麗な山々に囲まれた前橋・高崎地域においても、山を神として祀る祭祀遺跡が発見されている。

標石遺跡

標石は三夜沢赤城神社の後方の荒山中腹に位置する6世紀の祭祀遺跡である。南北に長い輝石安山岩の巨石を中心として、周囲にも径1～2mほどの露出した自然石が分布する。巨石の周囲では石製模造品や手掘土器などの祭祀遺物を中心に採集されている。本遺跡は背後にそびえる赤城山に対する畏怖崇敬の念から、巨石を神が宿る依代として祭祀を行っていた遺跡と考えられるが、本遺跡の周囲には同時期の集落が見られず巨石祭祀のあり方を考える上で貴重な遺跡である。



標石遺跡



マツリの道具の出土状態

正観寺遺跡群

巨石の大きさは、幅・奥行きともに約2m、高さ1.1m程である。およそ1400年前（6世紀後半）の特徴をしめす土器約44点が巨石の南東側で数多く見つかった。ここを正面と考えると、巨石の向こうに仰ぎ見るのは榛名山である。遺物は巨石の底に近いところに置かれたものと、それが60cm程埋まったあとのものと2つに分けることができ、複数回にわたり置かれたと推定できる。

第5章

祖先を祀る -古墳祭祀-

古墳は死者を埋葬する墓であると同時に、さまざまなマツリを行う祭祀の場でもあった。『古事記』の中に、死者が黄泉の国の食べ物を食べてしまうと現世に戻ることができないという「黄泉戸喫」の話が登場する。また黄泉の国の入口を大きな石でふさぎ、死者に対して別離を宣言する「事戸渡し」をする場面もある。どちらも横穴式石室でのマツリをベースにしてできた神話であるという説もあり、石室内に納められた土器群は、このようなマツリが行われていたことを彷彿させる。土器群だけでなく、石室内の外に納められた遺物には、亡くなった者に対する祈りが込められているのだろう。



『古事記』「事戸渡し」の場面のイラスト

鏡音塚古墳

高崎市の西側に広がる八幡台地上に本古墳は位置している。6世紀末から7世紀初頭につくられた前方後円墳で、築造当時の全長はおおよそ100mであったと考えられている。石室には銅鏡4点をはじめとして、鏡・装身具・武器・武具・馬具・工具・須恵器といったおびただしい量の副葬品がおさめられていた。このうち、9点の須恵器は玄室の入口付近に据え置かれていたと思われる。また石室内からは桃の種子も出土しており、死者に対して食物をそなえるマツリが行われていたとも考えられる。



桃の種子も出土した石室

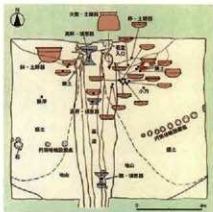
大室古墳群

前橋市西大室町に所在する大室古墳群では6世紀後半に造られた3基の前方後円墳である、後二子古墳（前方後円墳：



墓前祭祀に使われた土器（後二子古墳）

81m）、小二子古墳（前方後円墳：38m）や内壘1号墳（前方後円墳：35m）の墓前祭祀跡が発見された。環や鉢などの食器を用いて、石室の前で火をともす葬送儀礼が行われたものといえ、『古事記』に記された黄泉戸喫を想起させる。



祭祀跡の復元（後二子古墳）

両地域の発掘調査では、古墳時代の5世紀後半から6世紀にかけての祭祀跡が多数発見されている。その祭祀跡で使用された製品としては、石製模造品、生活用の土師器や須恵器、手捏土器、鉄製品、木製品が一般的で、それぞれの集落で作られたものと考えられる。

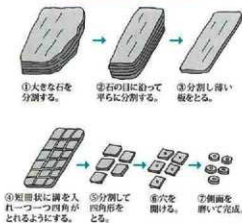
大屋敷遺跡

大屋敷遺跡から発見された石製模造品は、製品が259点を数え、剥片が358点以上出土しており、石製模造品の製作跡であったと考えられる。大屋敷遺跡の石製模造品石材の割合は、滑石が4割、珪質凝灰岩が6割を占めている。滑石製品は、盾や紡錘車等のように丁寧な加工を施す「精製」製品に用いられている。それに対して、珪質凝灰岩製模造品は、薄く剥かれ易い性質のため、勾玉・刀子・斧・有孔板等の扁平化したものに用いられ、「粗製」製品といった傾向がうかがえ、中には自然面を残したままの製品も見られる。

高崎城14遺跡

銅川南部の山地で産出する滑石を集落に持ち込み、祭祀などで使用する器物を模した模造品や白玉などを製作した工房跡が高崎市内においても確認されており、下佐野Ⅱ遺跡、柴崎熊野前遺跡、新保田中村前遺跡、行力春名社遺跡、高崎城14・18遺跡、高崎情報団地Ⅱ遺跡、田端遺跡、上並榎屋敷前遺跡、並榎台原遺跡、熊野堂遺跡、舟橋遺跡などが知られている。特に、鳥川と井野川沿いには点々とこの種の遺跡が所在している。①原石を小さく割り整形する→②穴をあける(穿孔する)→③磨いて仕上げる、と大きく3工程を経て製品に仕上がるが、これらの工程で失敗し廃棄されたものが出土している。

白玉の製作工程 ～珪質凝灰岩～



刀子の製作工程 ～滑石～



白玉・勾玉の製作工程



子持 勾玉

勾玉は縄文時代に出現し、弥生・古墳時代には、貴重な装身具として扱われた。子持勾玉は、古墳時代の5世紀中ごろに出現し、7世紀まで作られた。滑石や碧玉などの磨くと光沢が出る石材を使い、初期には断面が厚く重厚なつくりであったが、時代とともに板状の薄い形態へと変化する。国内では東北地方から九州、朝鮮半島南部でも出土し、その数約350例を数える(群馬県内では約60点)。大型の勾玉表面に小さな勾玉形(子)を表現したため、この名称となった。一般的に、神マツリに用いる勾玉の一種と考えられ、その特異な形から、「増殖」にかかわる呪術に使用したと推定される。



『古事記』誓約の場面のイラスト
スサノオの神は、「勾玉を噛み砕き、清らかな男子を生む」と、姉のアマテラスの神に誓う。そこに増殖(まし、ふやすこと)の意味をみる。

前橋 maebashi

あんづう ぼらいせき
安通・洞遺跡 前橋市粕川町室天

安通・洞遺跡は、粕川と山伏川に挟まれた台地上に位置する。粕川の氾濫によって堆積した砂層の上部から縄文時代後期～晩期の遺構や遺物が検出され、さらに砂層の下位の層から縄文時代中期の遺構や遺物が検出されている。

調査の結果、縄文時代中期の土坑や後期の敷石住居・埋燵、晩期の配石遺構等が確認された。出土遺物は縄文時代中期～晩期の土器や石器が主体だが、呪術に使用したと考えられるミニチュア土器や垂飾りや耳飾りも出土している。特に耳飾りは形や大きさにバリエーションがあり、朱が塗られるなど装飾的なものもみられる。

群馬県における縄文時代後期～晩期の遺跡と比較して標高の高い場所に立地していることが特徴的で、貴重な成果を上げることができた。



耳飾り出土状態

さんのおういじ
山王廃寺 前橋市総社町総社

山王廃寺は前橋市総社町総社の山王地区に所在し、7世紀中葉～後葉に創建されたと推定される古代寺院の跡である。

これまでの発掘調査成果から、北に講堂、南東に塔、南西に金堂を配し、その四方を一辺約80mの回廊で取り囲む法起寺式伽藍配置の寺院であったことが判明した。また平成18～22年度にかけての範囲内容認調査により新たな基礎建物や掘立柱建物群が検出されるなど、山王廃寺に関する研究が更なる深化が図られるとともに、周辺の総社古墳群や上野国府解明への糸口ともなろう。



基礎建物跡

おわたりのりどういせき
大渡道場遺跡 前橋市大渡町二丁目

大渡道場遺跡は、標高山東麓の緩やかな傾斜地に位置する。調査の結果、古墳時代の水田跡・畚跡、平安時代の住居跡・溝、中世以降の掘立柱建物跡・土坑・柱穴・火葬墓・埋納備蓄銭が検出された。注目される遺構・遺物としては、威背器と考えられる常滑焼の壺と埋納備蓄銭が挙げられる。陶器壺は中世の墓壺と考えられる土坑から完形で出土し、壺の胴部には「女」の刻書がある。また埋納備蓄銭は中世の溝跡の底面で検出され、銀物質の箱が通された貨幣が6割、枚数にして572枚出土した。これらは中世や朝鮮からの渡来銭で、北宋時代(10～12世紀)のものが主体であり、15世紀後半埋納されたと考えられる。この頃周辺には菅城や石倉城、大友城が存在し、本遺跡は中世上野国の中心地の一つに集まった。今回検出された埋納備蓄銭は、どのような意図をもって埋納されたのであろうか。



埋納備蓄銭出土状態

もとそうじやうあうみいせきでん
元総社蒼海遺跡群 前橋市元総社町

元総社蒼海遺跡群は前橋台地西部に立地する縄文時代～中世にかけての複合遺跡の総称である。古代では上野国府の推定地であり、上野国分僧寺・尼寺にも隣接し、政治・文化の中心地として栄えた場所である。

直接国府に結びつく遺構は検出されていないものの、近年の発掘調査により古代の役人の帯飾りである丸簾など上野国府の存在をうかがわせる資料が出土しており、徐々にではあるが遺跡の全容が判明しつつある。



調査地点全景

あさくらこうぎやうぶどうちん ちんいせきでん
朝倉工業団地遺跡群 前橋市下佐馬町・亀里町

朝倉工業団地遺跡群は前橋市南東部に位置し、調査区西側には利根川の支流である端久川が流れている。

調査の結果、1・2区では、6世紀初頭の榛名山の噴火により埋もれた水田や、12世紀初頭の浅間山の噴火により埋もれた水田が検出された。また3区では古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡が12軒検出された。その他中世の豪族居館の一部とみられる溝跡が検出されている。

特筆される出土遺物としては、3区で古墳時代後期の住居跡から出土した三環鈴が挙げられる。鈴部破片だが馬具と考えられ、県内での出土事例もわずかであり、本遺跡の北東に位置する広瀬古墳群との関連をうかがわせる貴重な成果と言えよう。



竪穴住居跡の遺物出土状態

まえばしじょう (さん)のまるまもんぶどうちん
前橋城 前橋市大手町二丁目

前橋城は利根川左岸の前橋台地北端部に位置する。徳川家康が「関東の華」と讃えた名城であり、これまで数回にわたる発掘調査により、その全容が明らかになりつつある。

三の丸門東地点の調査では、平安時代の竪穴住居跡2軒や前橋城周辺の堀跡などが検出された。調査区中央部で検出された再築前橋城三の丸外堀跡は東西に伸びており、断面形は階段状を呈する。また三の丸跡のみ自然石を積み上げた石垣が構築されていた。この層に並行して、石組みの側溝を伴う道路状遺構が検出されており、絵図と照合した結果、酒井氏時代から存在していた「千人小路」と呼ばれる道路であることが判明した。



前橋城三の丸外堀全景

高崎 takasaki

おおやぎ いせめぐりいせき 大八木・伊勢廻遺跡 高崎市大八木町伊勢廻

大八木・伊勢廻遺跡は井野川と唐沢川が合流する付近に位置する。今回の調査では弥生時代・古墳時代前期・平安時代の竪穴住居が検出された。中でも弥生時代中期後半の竪穴住居4軒のうち3軒が火災にあった住居であった。

3号住居跡からは、住居が焼失した直後にまとめて廃棄されたものとみられる土器群が出土し、当時の組み合わせがうかがえる良好な資料である。



遺物出土状態

かみよとおか ひきまいせき 上豊岡・引間遺跡 高崎市上豊岡町引間

上豊岡・引間遺跡は高崎市街地の北西、烏川と碓氷川に挟まれた台地上に位置する。

今回の調査では弥生時代～平安時代の竪穴住居跡18軒などが確認された。本遺跡周辺には弥生時代後期～古墳時代にかけての集落が分布しており、今回検出された住居跡も一連の集落の一部だろう。中でも1号溝跡から出土した高環は、脚部の内側に土玉2個を入れ、円盤状の粘土で蓋をした珍しいものであり、何らかのマツリに関係する可能性がある。



1号溝出土高環X線写真

たかぎき せせむらひいせき 高関・塚村遺跡 高崎市高関町塚村

高関・塚村遺跡は前橋台地西部の微高地上に立地し、今回の調査では多くの竪穴住居跡や溝跡が検出された。特に32号土坑では、横に寝かされた甕と、その口に蓋をするような上半分を欠いた甕が発見された。土器の特徴や出土状況から、古墳時代前期の土器棺と考えられる。この土器棺に葬られた被葬者はどのような人物だったのだろうか。



土器棺出土状態

しもおおいり なかみちいせき 下大類・中道下遺跡 高崎市下大類町中道下

下大類・中道下遺跡は井野川にそそぐ小河川間の微高地上に位置する。本遺跡の周辺には同様の微高地上に古墳時代の集落が点在する。

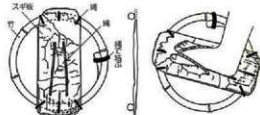
調査の結果、古墳時代後期～平安時代の溝跡4条が検出された。周辺の遺跡では竪穴住居跡を確認しており、今回検出された溝跡はこれらの集落を区画する溝と考えられる。6世紀後半の3号溝跡からは古墳時代後期の環や甕がまもって出土し、底を故意に打ち欠いた土器もみられることから、何らかの祭祀が行われたと考えられる。



3号溝遺物出土状態

かみなみえ きびつづいせき 上並榎・下松遺跡 高崎市上並榎町下松

上並榎・下松遺跡は烏川左岸の低地に位置する。調査の結果、古墳時代前期・後期および平安時代の水田跡が検出された。この内古墳時代後期の水田跡からは、畔を作る際の補強材に転用された田下駄が発見された。庭倉に強く加工しやすい杉材が用いられている。また底面には円形の部材を取り付けた痕跡が確認され、「輪かんじき型」と呼ばれる形状だったことが判明した。有機質である木材が土中に残存するケースはまれであり、貴重な発見といえる。



田下駄想定復元図

あした てんおうほらいせき 矢田・天王原遺跡 高崎市吉井町矢田字天王原

矢田・天王原遺跡は瀧川右岸の発達した河岸段丘上に位置する。調査の結果、7世紀前半の竪穴住居1軒が検出された。この住居の床面にはきれいに敷かれた植物の圧痕が一部炭化した状態で検出され、床に敷物を敷いて生活していたことが想定される。植物等の有機物は土中に残りにくいいため、貴重な出土事例といえる。



1号住居跡床面の状態

高崎 takasaki

八幡・六枚遺跡 高崎市八幡町字六枚

八幡・六枚遺跡は碓氷川と烏川に挟まれた「八幡台地」上に位置する。調査の結果、古墳時代～平安時代の竪穴住居13軒が検出された。特筆される遺物として、1号住居跡の覆土から文字が刻まれた土器が発見された。土器は住居の時期より古い8～9世紀のものであり、外面には焼成前に「片雲郡」と刻まれている。近年八幡台地の遺跡から、古代の役所を示唆する遺構や遺物の検出が相次いでおり、八幡～劍崎地区に古代の「片岡部面」(役所)が存在した可能性がある。



「片雲郡」刻書土器

吉井・雑木味遺跡 高崎市吉井町吉井字雑木味

吉井・雑木味遺跡は鏡川右岸の下段段丘面に立地する。以前より古代の瓦が出土することから、寺院跡ないし郡衙跡の推定地であった。今回の調査で注目されるのは、遺跡北東で検出された基壇状遺構である。周囲に溝を巡らせ、その内側に土を盛り上げている。また陶物の罫型や瓦塔片と考えられる遺物も出土するなど、通常の集落遺跡とは異なる様相も確認された。ただし本調査で確認されたのは基壇の一部であるため即断はできない。当初推定された寺院跡・郡衙跡の発見は今後の調査に期待したい。



基壇状遺構

黒熊遺跡群 高崎市吉井町黒熊

黒熊遺跡群は鏡川右岸の河岸段丘上に位置する。特に注目されるのは罫が付着した容器である。容器の上端には後から取り付けたと考えられる注ぎ口が取り付けられており、溶けた金属を罫型に注ぐための取り皿と考えられる。また底に開けられた穴は粘土で塞がれ、容器の内面は丁寧に整えられていることから、元々金属の罫型として使用され、その後取り皿に転用されたと考えられる。もう一点の遺物も整えられた面があり、罫型と考えられ、これら2点がセットであれば香炉の火舎の罫型であろうか。周囲には集落跡や古代寺院跡が存在することから、これらの遺物は、古代寺院を維持するために職人集団が銅製品を作成するために使用したと想定される。



上から見た罫型

高崎城遺跡 高崎市高松町

今回の調査地点は西上州の拠点である高崎城の二の丸に位置する。江戸時代の遺構としては、主に18世紀代の井戸や多くの柱穴が検出された。高崎城の絵図より、本調査地点は18世紀には家臣の屋敷として利用され、19世紀には芝間(広間)となり、幕末には再び屋敷地として利用されたことがうかがえる。出土遺物の年代は絵図の変遷を裏付けている。特筆される遺物としては、奥内3例目となった一分金の発見である。屋敷地の居住者が所有していたものであろうか。江戸時代以外の遺構としては、8世紀初頭の石郭墓(50号土坑)や明治時代に建設されたレンガ造りの兵舎跡などがある。



調査地点全景



前橋会場

入場無料

主催：前橋市・群馬県教育委員会

2013年1月9日(水) ▶ 15日(火)

午前9時 ▶ 午後6時

[前橋プラザ元気21 1Fにぎわいホール]

前橋市本町2-12-1

問い合わせ TEL.027-231-9531

前橋市文化財保護課



高崎会場

入場無料

主催：高崎市・群馬県教育委員会

2013年1月19日(土) ▶ 28日(日)

午前9時 ▶ 午後6時

[高崎シティギャラリー 2F 第6展示室]

高崎市高松町35-1

問い合わせ TEL.027-321-1292

高崎市文化財保護課

遺跡報告会 前橋・高崎それぞれの最新の発掘調査成果を紹介します

※申込不要、定員60名、入場無料。

前橋会場

●平成25年1月14日(月・祝日) 13時30分～15時
●前橋プラザ元気21 1Fにぎわいホール

高崎会場

●平成25年1月20日(日) 13時30分～15時
●高崎市役所 中2階ロビー